

【現任スクールソーシャルワーカー対象】

## COVID-19 の感染拡大及びそれに伴う休校措置による スクールソーシャルワーク活動への影響に関するアンケート 集計結果

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で私たちの生活は一変しました。子どもたちは学校に通うことができなくなり、経済活動はストップし、人々は外出自粛を余儀なくされました。その間、家庭の経済状況が悪化したり、外出できないことがストレスとなり家族関係に不和が生じたり、職種によってはいわれのない差別や偏見の目を向けられるなど、感染の有無にかかわらず、多くの子どもやその家族が大きな困難に見舞われました。学校は休校になり、子どもたちの様子が見えにくくなった状況下で、スクールソーシャルワーカー (SSW)の皆さんは、どのように活動をされてこられたのでしょうか。そもそも活動することができていたのでしょうか。

日本学校ソーシャルワーク学会研究委員会では、この未曾有の事態がスクールソーシャルワーク活動へどのような影響を及ぼしているのかを緊急調査することにいたしました。

アンケート実施方法：WEB アンケート (Google Forms を利用)

アンケート実施期間：2020 年 6 月末～8 月 16 日

アンケート対象者：日本学校ソーシャルワーク学会会員のうち、現役 SSW である者

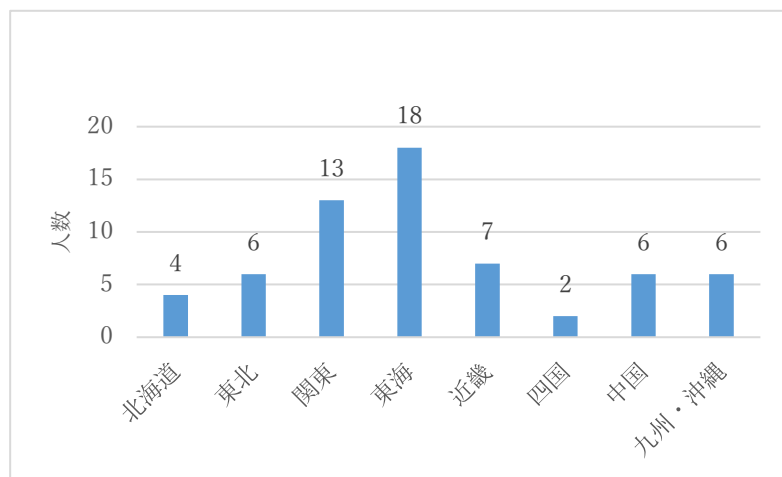
.....

有効回答数 62 (全回答数 70 重複が強く疑われる回答 8 件を除外した。)

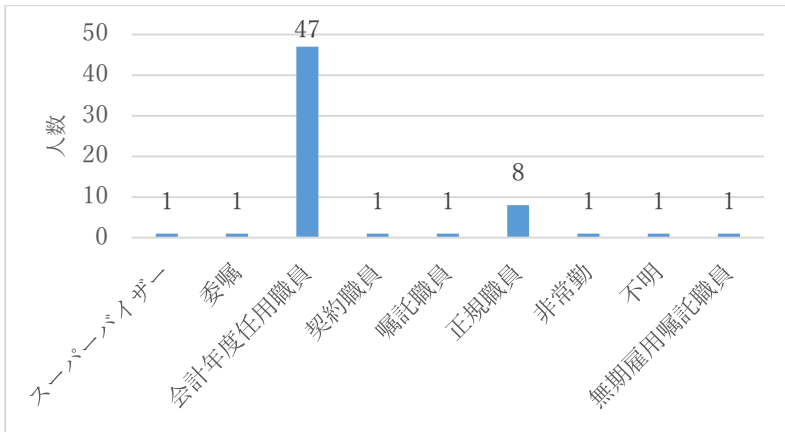
今回のアンケート調査は、学会ニュースレターの郵送時に、案内を同封する形で協力を依頼しましたが、周知が不足したためか、回答者数が十分ではありませんでした。それゆえ、この調査結果から、全国の SSW の活動の全体像を把握することはできませんが、回答してくださった方々の状況として分かったことをお知らせします。

### 【 I 選択式回答集計結果】

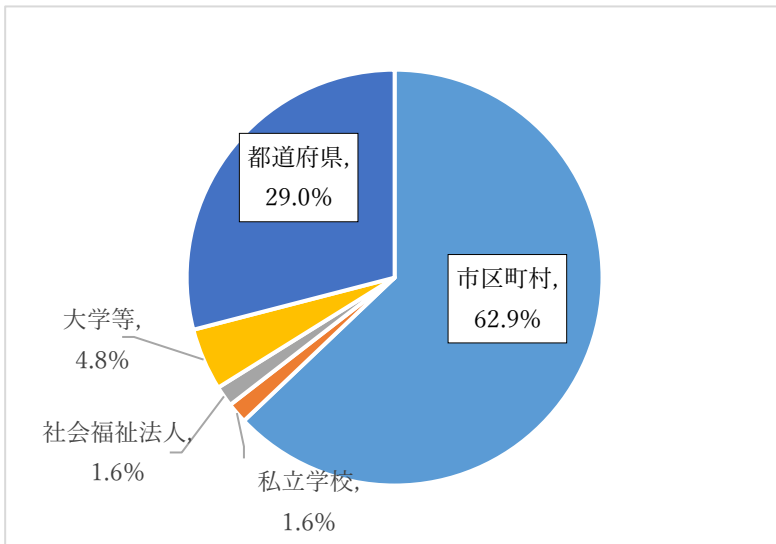
#### 1. 所属地域



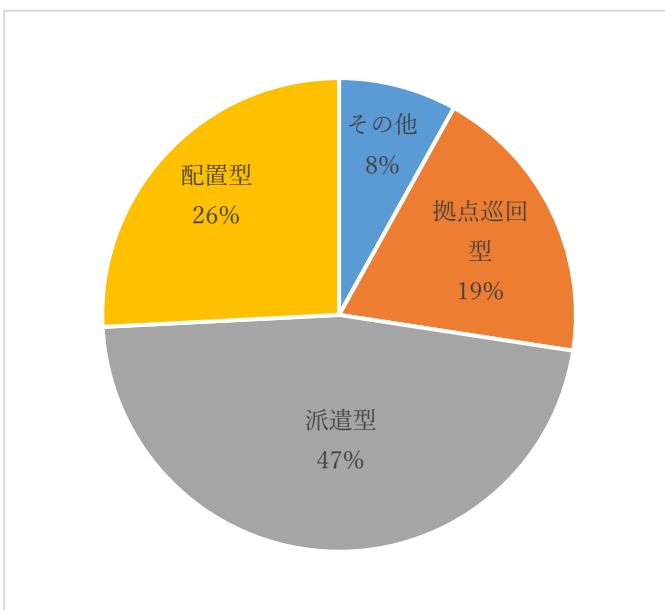
## 2. 雇用形態



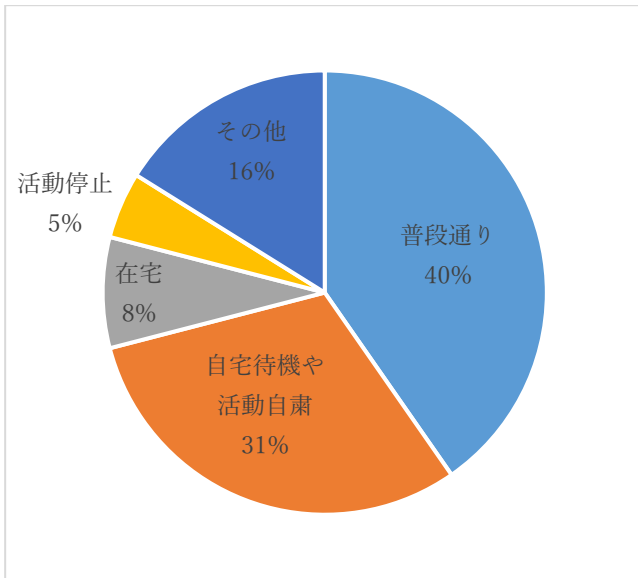
## 3. 雇用主



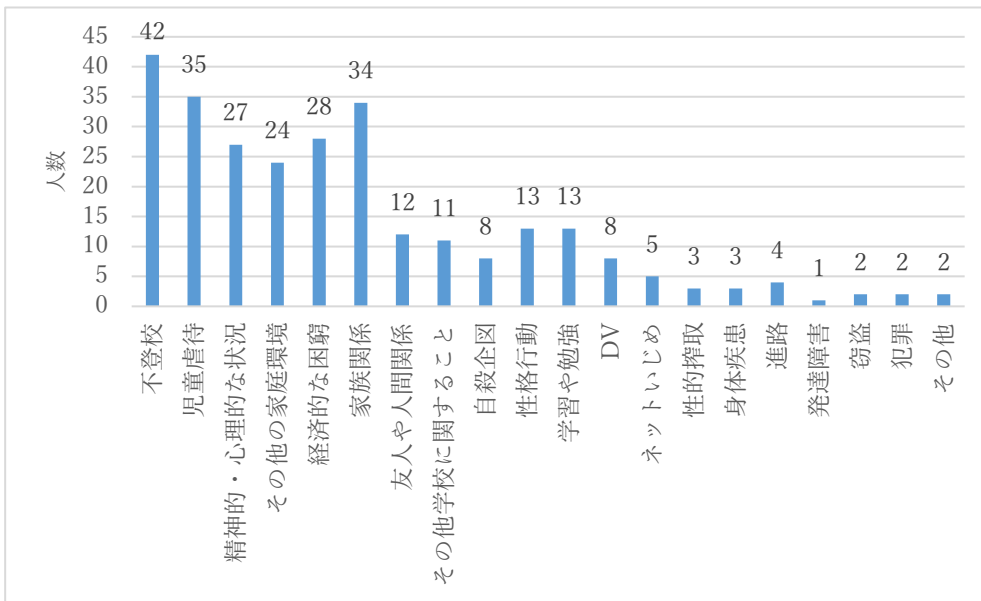
## 4. 配置形態



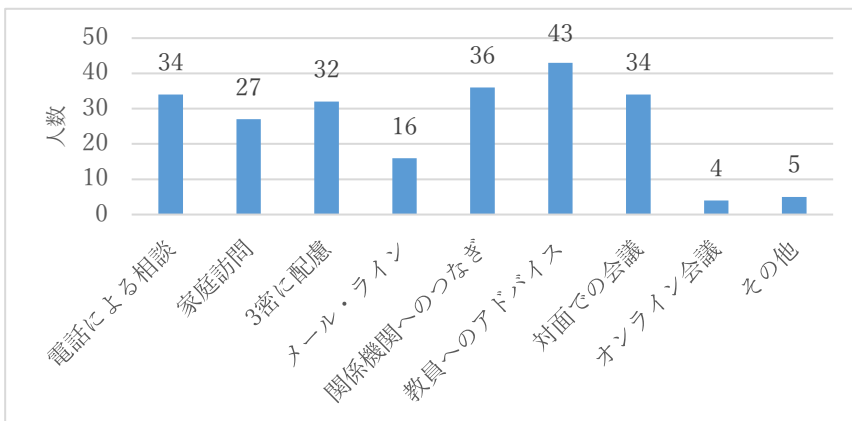
## 5. 学校休講中のSSWの勤務状況



## 6. 扱った相談内容 (複数回答)



## 7. 用いた支援の方法 (複数回答)



## 1. ～7. のまとめ

本調査回答者は東海地区と関東地区からの回答で半数を占めた。今年度から会計年度任用職員制度が始まり、自治体で採用されるSSWの多くは、一般職である会計年度任用職員となった。それを反映し、本調査でも回答者の76%は会計年度任用職員だが、正規職員も8名(13%)いた。

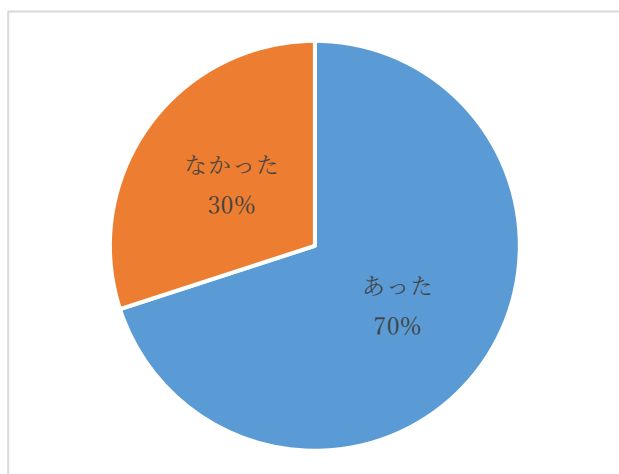
回答者の6割以上は市区町村採用で、都道府県採用は3割弱。大学や私立学校に所属している者も若干名いた。配置形態は、多い順に派遣型、配置型、拠点巡回型となっていた。

休校期間中、全回答者の40%は「通常通りの活動」をしていたが、「自宅待機か活動自粛」と「在宅勤務」を合わせた割合も約40%で、自治体によって動きが全く異なった。中国ブロックの回答者は全員「普段通りの活動」をしていたが、それ以外のブロックでは、ブロック内でも違いが見られた。

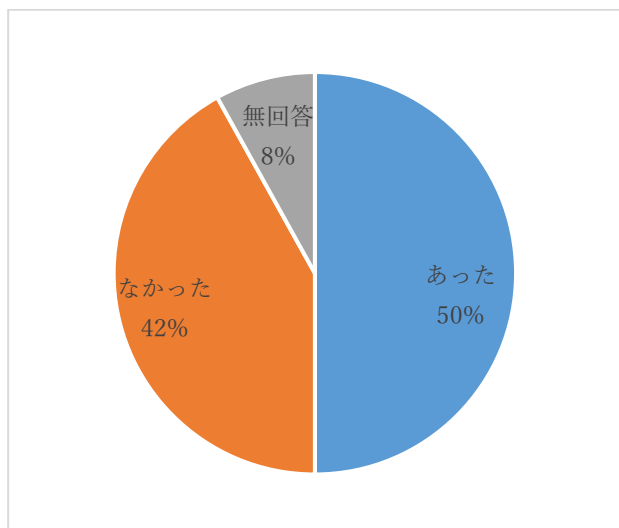
この間、半数以上の回答者が不登校・児童虐待・家族関係に関する相談を扱っており、経済的困窮に関する相談には28人(45%)が対応していた。

家庭訪問を行ったのは27人(44%)にとどまり、教員へのアドバイス・関係機関へのつなぎ・対面での会議・三密に配慮した面談は、半数以上のSSWが実施していた。16人(26%)と多くはないがメールやLINEを用いての活動も行われていた。

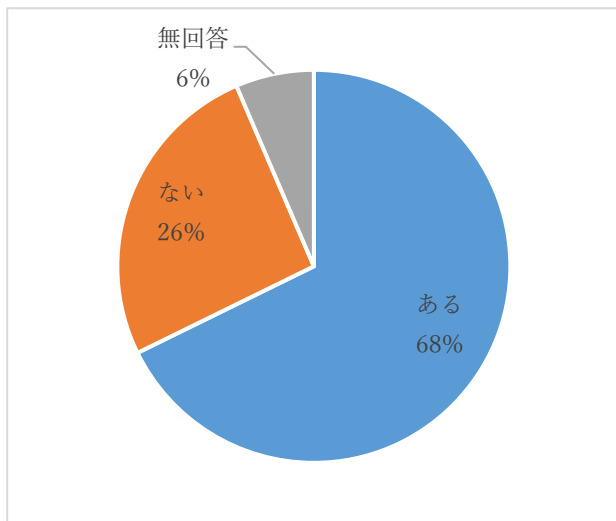
## 8. 休校になった際、所属先のチームの一員として、SSWに対する説明や指示、サポートの有無



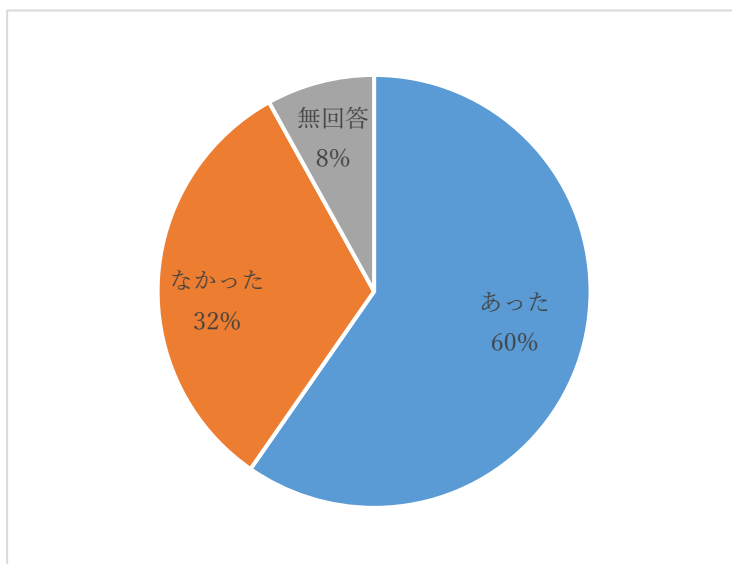
## 9. 学校再開後の活動について事前の連絡調整や共有の有無



#### 10. 学校再開後の活動について不安に思っていることの有無



#### 11. 休校前後でのSSW自身の意識の変化の有無



### 8. ～11. のまとめ

8. および9. の問いは、SSWが教育委員会や学校等所属先の一員として認識されているかを確認する問いでもあった。7割は、休校にあたっての説明や指示等が「あった」と回答したが、3割は「なかった」とのことだった。また、学校再開にあたっての事前の連絡調整などに関しては4割を超えるSSWが「なかった」と回答した。

学校再開後の活動に不安を持っているSSWが7割弱おり、また、休校前後でSSWとして自分自身の意識に変化があったかどうかの問いに対しては、6割が「あった」と回答した。

## 【Ⅱ 自由記述の概要】

### 1. 緊急事態下の活動を通して課題だと思ったと、困ったこと

- 子どもに会えない、把握できない
  - 休校になり子どもの様子が全く分からない
  - 家庭訪問できない
  - 面談継続困
  - 難生活状況把握できない
  - 虐待ケースが見えにくい
  - 緊急事案以外動けなかった
- 情報共有困難
  - 交代勤務で、情報共有が伝言かメールとなり、時間がかかる、齟齬が生じる
  - 在宅勤務での情報共有が困難
  - 担当者との連絡が取りにくく、支援体制構築に時間がかかる
  - 電話対応禁止で、対応困難
  - 関係機関との連絡がりにくい
- 学校が動かないから情報がこない
  - 学校が子どもの把握をできないと、SSW に情報が来ない
  - 教員が子どもの生活状況を把握できず、SSW に情報が来ない
  - 授業もなく家庭訪問も中止で、担任が児童や家庭のことを知らない
- 学校によって異なる対応
  - 虐待対応部署との日頃からの連携の程度によって学校での対応に差が生じた
  - 子どもの状況確認の有無が学校によって異なる
- 地域の機関・資源ストップで対応・連携が困難
  - 地域の見守り役（民生委員・子ども食堂等）活動中止
- 行政の対応力低下
- 支援機関の動きがストップ、家族への直接支援の手段が不足
- 児相は通常勤務だが学校は在宅勤務もあり連携が弱まる
- 体制の不備
  - 組織的対応に一貫性がなかった
  - 教育委員会から SSW へ活動指示が出にくかった
  - 管理職も SSW も今年度から。引継ぎなしの状態です。休校になった
  - 速やかな組織内の情報集約、指示の徹底（が必要）
  - 県教委と一度も研修することなく勤務をつづけることになった
  - リモート対応システム整わず。家庭訪問禁止で対応中途半端に。
- 記録について
  - 限られた出勤日に記録の確認、情報収集をするのは困難
  - 関わるケースが増えれば、考えたり記録したりする時間が足りなくなる
  - 記録の大切さを感じた
- 感染への不安
  - 地方で感染者の少ない中、冷静さを欠いた過剰な反応がある
  - 自分が感染させる可能性
  - 自らも不安になった

### 2. 学校再開後の活動について気になること・心配なこと

- 勤務体制に関すること
  - 勤務日数が足りない
  - 年度始まるの生徒集会が出来ず、SSW について周知が不十分。
- 感染対策と実践のバランス
  - 危機介入のタイミングを逃すリスク
  - マスク着用のため表情が読み取りにくい、
- 声が聞き取りにくい等、サインをキャッチしづらい。しかしマスクは感染リスクを防ぐために必須であり悩ましい
- 学校・教員に関すること
  - 教員の疲弊
  - 余裕がない中で学校の運営
  - 教員の疲労蓄積により、チーム支援のエネ

- ルギーや意欲に支障が出るのではないか
- 学校によって、不登校児童生徒への対応に差が生じている(感染予防で接触回避か、積極的な関りか)
- 子ども・家族に関すること
  - 子どもの疲れ
  - 子どもの戸惑い
  - 学習の不安
- 児童生徒や保護者が担任との関係構築をできないまま、家庭の問題顕在化
- 生活リズムの乱れからの不登校
- 不登校の増加
- 経済的困窮の子どもへの影響
- 感染に関すること
  - クラスターの発生
  - 感染する、感染源になる危険性・不安

### 3. 休校前後でのSSWとしての自分自身の考えの変化

- 対面カリモートか
  - 直接身近にかかわることの効果がいかに大きいかを実感した
  - 平素から電話やメール、LINEでつながっておくことの重要性に改めて気づき、自信を持てた
  - 活動にオンラインやリモートを取り入れるべき
- 日常からの関係構築の重要性を再認識
  - 普段からの子どもや保護者との関係構築がないと、休校になったときに接触ができなくなる。普段から信頼関係を積み重ねておこう
  - 日頃の活動がいかにものをいうかと感じた。
- 子ども・家族への柔軟かつきめ細やかな対応への意識向上
  - マスクで表情が見えないためよりこまめに子どもを観察するようになった
  - 家庭状況の変化への気づきと対応をより早く行いたい
  - 今までよりさらに柔軟に臨機応変に対処していかないといけない
  - 声を掛け合う関係の中に家族を巻き込んでいく支援が必要
- 失望感
  - 組織の判断力や協力の脆弱性を思い知り、モチベーションが下がった
- 体制・環境に関すること
  - 改めてチーム対応の重要性を感じた
  - 校内の連携、関係機関との連携を以前以上に進めたい
  - 再度休校になってしまった際に、支援対象者の様子把握を可能にするための体制や環境について考えるようになった
- SSWとしてすべきこと・あるべき姿への考察
  - 何があっても、子どもの命・安全・安心が一番であることの再確認
  - 今般のような状況下におけるアウトリーチ支援の在り方を考えていく必要を感じた
  - 接触や面接が制限される中で、ソーシャルワークの在り方について改めて考えた。
- SSWの存在意義・活動の意味についての考察
  - SSWの活動が学校という場によって支えられていることについて改めて考える機会となった
  - 活動に関する意味付けの徹底
  - SSWの活動の意義について改めて考えさせられた。何ができるのか、丁寧に考えていく必要がある
  - 今までに例を見ない状況の中で、SSWとして考えておかなければならないことは何か、常に意識するようになった

### 自由記述のまとめ

緊急事態下でSSWが困ったことの一つは、子どもの状況が把握できない、情報入手・情報共有ができないことであった。学校や地域の社会資源がその機能をストップさせてしまったことで支援が滞った。また、これまでの教育委員会や学校におけるSSWの位置づけやSSWとの協働体制構築の不備によって、SSWに対する速やかな指示が出ない、引継ぎなしの活動をせざるを得ない等が生じた。記録の大切さを実感する一方で、記録確認や情報収集の時間がないことへの懸念が発せられた。感染への不安も語られた。

学校再開後の心配事として、教員の疲弊や、子どもの疲れや戸惑い、生活リズムの乱れからの不登校、教師と児童生徒・保護者の関係構築ができないまま学期が進んでいったことへの懸念、感染対策と実践とのバランスをどうとっていくかについての葛藤などが語られた。また、これまで以上にしっかりと子ども

を観察し、子どもの声を聞いていなければならぬとの発言もあった。

休校前後で、SSW としての自らの考えに生じた変化を尋ねた問いに対しては、日頃からの関係構築の重要性についての再認識や、子ども・家族への柔軟かつきめ細やかな対応への意識向上、チーム対応や連携強化への動機づけ等が語られた。また、直接会って関わることの有効性を再認識した者がいる一方で、電話やメール、ライン等のツールを用いてつながっていることの重要性を確認できたという者もいた。さらに、この未曾有の状況下で、SSW の存在意義やSSW の活動の意味を考え、SSW としてすべきこと、重視すべきものは何かを改めて考えたという者も少なからず存在した。

(文責:馬場幸子 理事・研究委員会)